

『徒然草』近世的享受の一面

—— 艸田齋寸木子三徑『つれづれ草絵抄』序説 ——

大久保 順 子

近世期に刊行された種々の古典作品のうち、『徒然草』の場合も、多種の絵入版本や図入注釈書が存在する。その諸本の中でも非常に多くの図を持つ書に、艸田齋寸木子三徑『つれづれ草絵抄』（元禄四年「二六九二」刊）がある。本書の「絵」の特質と『徒然草』享受の一樣相について、他の諸本と比較しつつ、若干考察してみたい。

一、『つれづれ草絵抄』

『つれづれ草絵抄』は上下二巻、二冊の刊本である。架蔵の元禄四年板は、縦二六・〇cm×横一八・五cm。料紙は楮紙、袋綴。無地の青色（錆御納戸）表紙の左肩に印刷の

子持ち粹題簽（縦一九・〇cm×横四・〇cm）があり、外題に「新板 大字／つれづれ草絵抄／よみくせ 区切付 下」（第二冊前表紙。第一冊前表紙欠）とある。内題はなく、上巻一丁表に「つれづれ草大意」「つれづれ草題号」「兼好傳記（文末に「…元禄三年午の年まで凡そ三百四十一年になる也」の記述あり）」の文、同丁裏に「兼好法師徒然筆作図像」の題及び「世の中をわたりくらへて今そしる阿波のなるとは浪風もなし」の歌を記した兼好法師の口絵がある。柱題は「つれづれ上（下）」。単辺の匡郭が縦二三・四cm×横一六・四cm。上巻二丁以降は、頭書（匡郭上部縦五・六cm程）に図、その下に『徒然草』本文が入るといふ形態になっている。本文の一行数十二行、第一冊上巻六三・

五丁、第二冊下巻五〇丁、全一一三・五丁。遊紙はなし。

頭書図は上巻二丁以降、各丁表裏に存する（図の位置については後掲一覽表参照）。漢字平仮名混じり文の本文、書入はなし。第二冊下巻末に「雒陽處士 艸田齋寸木子三徑圖讚」、刊記「元禄四年 辛未初春日 書林

（空白）」（下巻、第五十丁裏）。本書第二冊後表紙の無地楮紙見返しは後補のもの⁽¹⁾とみられる。第一冊前表紙を欠く破損の他、全冊とも疲れ・虫損あり。下巻には、第八丁・第三十三丁などの丁の下部の撚れが幾つかあり、あるいは補修の際に生じたものか。

作者の艸田齋寸木子三徑すなわち苗村丈伯については、『女重宝記』等の作者として、早くから鈴木行三氏⁽²⁾や大田栄太郎氏⁽³⁾らが、宇津木昆台『日本医譜』の彦根藩主井伊氏の侍医苗村丈伯の略伝⁽⁴⁾を元に論じている。『日本医譜』は致仕後の丈伯が江州野洲郡落合村に隠棲したことを記すが、丈伯の〈絵抄〉作品である『つれづれ草絵抄』（元禄四年刊）・『伊勢物語絵抄』（元禄六年刊）の末尾署名「雒陽處士」より、当時の京都在住が推測されている。

『伊勢物語絵抄』を「本文だけでは読解できない、しかし煩雑な語句の出典・考証など不要な読者に対して、簡単な注を提供して読みやすくするという姿勢⁽⁵⁾」の書とする市古夏生氏は、丈伯の〈絵抄〉作品の「学問的な意味は認め

られない」として、注釈部分の先行作品借用の可能性を指摘する。『つれづれ草絵抄』の場合は、さらに「挿絵を本文理解に役立たせることに力を入れ、『徒然草』程度なら注は不要と考えたのであろう⁽⁶⁾」とし、「苗村丈伯の方は医書、儒書、辞書などの硬い書物の場合に、艸田子などの戯号の方は軽いものの場合にというように使い分けている」ことから、これら古典作品の〈絵抄〉の「艸田齋」という署名を「その著作に対する丈伯の意識——たいした物ではないという——の反映⁽⁷⁾」と市古氏はみている。

著作の方法上、丈伯は「殊に年中重宝記などには明白に、本書は創作物でないといふことを、「こゝに今和漢の古書を採遮てその要を摘……」と自著にもらしてゐながら、それにも拘らず、その発表物には出點を書かぬ人であった⁽⁸⁾」ともいわれ、丈伯の元禄七年から後の刊行書が今日見出だせないことを「先行作のストレートな利用の事実」の類版問題が絡んだ状況と見る指摘もある⁽⁹⁾。一方、本書には「章段の内容が巧みに具現化され」「さし絵の数が多いこと、絵に見あきぬ面白さがあること、絵がすぐれていること、絵入本徒然草としては、他に類例のない善本の一つ⁽¹⁰⁾」として、後の豆本類にも影響を与えたという絵画的評価がある。市古氏の「巻末に「艸田子図讚」などあるように、丈伯は絵を描く人であった⁽¹¹⁾」とする指摘もあり、作者の

『徒然草』享受の意識に関わるものとして、本書の「図」の部分も具体的に吟味していく必要があるだろう。

二、諸刊本との比較と他注釈書の影響

先行研究の指摘の通り、『つれづれ草絵抄』では、章段本文と対応する図がその上部に入る（一段分が複数面の図に及ぶ場合もある）。その際、図の中に本文の語句の一部（もしくは本文にはない解説的な句）が書き込まれることがある。これは『伊勢物語絵抄』とも共通する〈絵抄〉の方法といえよう。この『つれづれ草絵抄』（以下、本論中『絵抄』と略称する）の頭書図と、近世期のいくつかの『徒然草』絵入版本・注釈書の「絵」の内容とを、参考のため表に一覧し、対照した。

* 図入注釈書の例としては、松永貞徳『なぐさみ草』（慶安五年「一六五二」自跋）・『徒然草吟和抄』（内題「頭書徒然草絵抄」、元禄三年「一六九〇」刊）・岡西惟中『徒然草直解』（貞享三年「一六八六」刊）、『徒然草』絵入版本の例として万治三年「一六六〇」板・寛文十年「一六七〇」板・寛文十二年「一六七二」板・元禄十一年「一六九八」板・明和八年「一七七二」板、及び西川祐信『絵本徒然草』（元文五年「一七四〇」

板）とその続編『絵本忍婦草』（三冊本、寛延三年「一七五〇」刊）・『絵本垣衣草』（二冊、後刷本）を用いた⁽¹²⁾。

* 上段に『絵抄』の巻・段・頭書図内挿入語句（表記は原本に従う）・丁数表裏の位置を記し、それと対応する他の諸本の同趣の挿絵・図がある場合、その所在（巻・丁数・表裏など）を表内下段に記入。

* 頭書図内語句のうち『徒然草』本文にはない補足的語句は□で囲んだ。一図内の語句は列記していき、描線の仕切りは／で表す。その他、段によっては、図に該当する箇所本文語句を作者が（ ）に補った。「 」は本文にはない語句だが作者が補記した。

* 『絵抄』に図のない段はへゝに補記（下段と対照）。

* 各刊本の丁付（算用数字）は、各原本の表示に従う。

* 頭書図に段表示のない場合「□段」の形で補記。

* 『徒然草直解』は該当の段に登場する器物図名を補記。

* 『絵本垣衣草』第二冊（下巻）第九丁〜第十五丁は「一〜七」の丁付となっているが、本表では便宜上、通し丁数を算用数字で示す。

上巻	本文	備考
上巻	<p>『つれづれ草絵抄』巻段数(図掲載の形)・原本付属 表・圖書図内の題句(文字内段間以外の題句の題句) 必要に応じて該当箇所本文()もしくは補記「」を 加える(題句のない図内題句)・同図内題句は「」を 掲載仕切りは、図のな段は「」で構う。 【書体】「<u>後</u>」「<u>前</u>」 【図内】「<u>中</u>」</p>	<p>一 段 みかどの柳くらゐ。一人、竹の 圖・たゞ一人、となり 【題】「<u>後</u>」 【図内】「<u>中</u>」</p>
二 段	<p>いにしへの聖の御代のまつりと (衣冠より聖代にいたるまで)</p>	<p>上3才左 上3才右</p>
三 段	<p>麗麗にほされて所なためずまじ ひありき ひとりねかちにまどろむ夜なきこ そおかしけれ</p>	<p>上3才左① 上3才左②</p>
四 段	<p>(仏の道とからぬ) 願臺の中たご心・麗所の月 麗臺本字：こをきれかじをたて</p>	<p>上4才右 上4才左 上4才右 上4才左</p>
五 段	<p>あだしの とりへ山のけかり かけろふの夕をまら夏の柳の春秋を しらぬ</p>	<p>上4才右 上4才中 上4才左</p>
六 段	<p>衣裝にたき物する 久米仙人・物あらぬ女</p>	<p>上4才右 上4才左</p>
七 段	<p>(女は髪をめたらん) 女の紙すちをよれるつなには 大衆もよつたがる 女のはけるあしだてで作れる苗には 秋の鹿かならずとる</p>	<p>上4才右 上4才左 上4才右 上4才左</p>
八 段	<p>(家庭のつきくしく) 小坂殿(鎌・島・池・桂)【備】</p>	<p>上4才左 上4才右</p>
九 段	<p>かひひ・あかだな・かしの木・ 【備】 (おなじ心ならんと)</p>	<p>上4才右 上4才左</p>
十 段	<p>(ひとりとしびのものに文を)</p>	<p>上4才右 上4才左</p>
十一 段	<p>かすの床・して山が 糸による物ならなくひなれぬ 【備】 糸織御・ 【備】 【備】</p>	<p>上4才右 上4才左 上4才右 上4才左</p>
十二 段	<p>(しはしたびたちたるこそ)</p>	<p>上4才右 上4才中 上4才左</p>
十三 段	<p>山寺にかきこもりて</p>	<p>上4才左</p>
十四 段	<p>水を手してさくけのめける 朝にはおさめけり・そんなしん</p>	<p>上4才右 上4才左</p>
十五 段	<p>なごさ 下巻五 巻末四</p>	<p>上1才 上2才 上5才</p>
十六 段	<p>【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】</p>	<p>上1才 上2才 上5才</p>
十七 段	<p>【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】</p>	<p>上1才 上2才 上5才</p>
十八 段	<p>【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】</p>	<p>上1才 上2才 上5才</p>
十九 段	<p>【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】</p>	<p>上1才 上2才 上5才</p>
二十 段	<p>【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】</p>	<p>上1才 上2才 上5才</p>
二十一 段	<p>【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】</p>	<p>上1才 上2才 上5才</p>
二十二 段	<p>【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】</p>	<p>上1才 上2才 上5才</p>
二十三 段	<p>【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】</p>	<p>上1才 上2才 上5才</p>
二十四 段	<p>【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】</p>	<p>上1才 上2才 上5才</p>
二十五 段	<p>【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】</p>	<p>上1才 上2才 上5才</p>
二十六 段	<p>【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】</p>	<p>上1才 上2才 上5才</p>
二十七 段	<p>【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】</p>	<p>上1才 上2才 上5才</p>
二十八 段	<p>【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】</p>	<p>上1才 上2才 上5才</p>
二十九 段	<p>【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】</p>	<p>上1才 上2才 上5才</p>
三十 段	<p>【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】 【(絵入)】</p>	<p>上1才 上2才 上5才</p>

「つれづれ草紙抄」元禄四年刊本 頭書図	八十四	竹林院左大臣／ 源隆左大臣・元隆のくい・ 月弓ちてはかけ	上40才				
	八十五	法けん三蔵・こきやうの願をみて かなしみ 法蘭三蔵・やまひにあしては <small>（註）</small> けり しよくをねかひ給ひける	上40才	三31才	三31才		
	八十七	これつ中念ごん・圓伊柳正・ 三井寺	上41才	三34才	三34才		
	八十八	くがく坊 くがく坊の男・くがく坊・木はた・ なら法橋・兵士あまた くがく坊ゆせんせられ・馬は血つき てうぶ太鼓にはしる・口つき男・ くちなし原・里人出あふ	上41才	三36才	三36才	二17才	徒中6才7才
	八十九	和漢朗歌集	上42才	三42才	三42才		
	九十	なに阿茶肥伝（むごまたまや）	上43才	三40才	三40才		
	九十二	之鶴丸・大なごん法印 隆陽師	上43才	三43才	三43才		徒中7才8才 徒上18才
	九十三	もろ矢を手はさみて・師	上44才	三44才	三44才		
	九十四	牛を置人・牛をころもの	上45才	三47才	三47才	三34才	徒中1才
	九十五	ときは井の相国・北面	上45才	三48才	三48才	三11才	
	九十六	有職の人	上46才右	三50才	三50才		
	九十七	くちはみにさくれたる人	上46才左	三51才	三51才	なちみめ	
	九十八	身にしらみ有 家にぬすみ有 小人にさい有 くんにしに仁譽有 櫓に法あり	上46才① 上46才② 上46才③ 上46才④ 上46才⑤ 上46才⑥	三55才	三57才	三59才	
	百段	からみつ	上47才右	三55才	三57才	三59才	
	百段	こがの相国	上47才左	三57才	三57才	三59才	
	百二段	六位外記藤綱	上47才右	三59才	三59才	三59才	
	百三段	又五郎・近衛との	上47才左	四2才	四2才	四4才	
	百四段	くすし忠守・からへいじ・なぞく・ 大なごん公明・大かく寺殿	上48才	四4才	四4才	四4才	
	百五段	荒たる宿の人めなきに <small>（註）</small>	上48才	四7才	四7才	四7才	
	百六段	男・女どなげしにしりかけて <small>（註）</small>	上49才	四9才	四9才	三17才	
	百七段	虚空上人	上49才	四11才	四11才	四11才	
	百八段	ほり川の内大じん・なにかしの 大なごん 安喜門院・浄土寺のくわん白 あやしの下女・山しなの左大臣・ 女のなき世なりせばあもんもかより もひきつくる人も待らし	上50才	四14才	四14才	四14才	
	百九段	しやれいうん・白藤田・をせん法師	上51才	四19才	四19才	四19才	
	百十段	萬名の木のほり・あやまちすれむし ておりよ <small>（註）</small>	上52才	四21才	四21才	四21才	
	百十一段	てだてまごふ・すこ六の上手	上52才	四21才	四21才	三20才	
	百十二段	あるひり	上52才				
徒然草 巻五末	萬治三	道隆下 吟和抄	上70才				
寛文10	寛文10	寛文10	上70才				
寛文12	寛文12	寛文12	上70才				
元禄11	元禄11	元禄11	上70才				
年刊本	年刊本	年刊本	上70才				
明和八	明和八	明和八	上70才				
絵本徒然	徒然草	徒然草	上70才				
忍婦・短衣	忍婦・短衣	忍婦・短衣	上70才				
徒中8才9才	徒中8才9才	徒中8才9才	上39才				
徒中9才10才	徒中9才10才	徒中9才10才	上39才				
徒中10才11才	徒中10才11才	徒中10才11才	上48才				
徒中11才12才	徒中11才12才	徒中11才12才	上49才				
徒中12才13才	徒中12才13才	徒中12才13才	上49才				

『これ』新刊本 元禄四年刊本 備前國	百十三段	心つかに逢すへきわざをひかく 名・備前おもむく人	上53才										
	百十四段	老人わかき人にましわりけり うんと物ひたる	上53才										
	百十五段	ためり・今出川のおほい殿 さい玉丸	上54才	四25才									
	百十六段	宿願・しらほんじ・いろをし坊 （きまひてともに死にけり）	上54才	上55才	四28才								
	百十八段	物くるよ友・くすし・ち系ある友 物くるよ友	上55才	上55才	四30才								
	百十九段	このあつ物くよ	上55才	上55才	四32才								
	百廿段	かまくらの海・研八から年より かつき	上56才	上56才	四34才								
	百廿一段	（むつこしなね）	上56才	上56才	四35才								
	百廿二段	（やしなひかゝ物には馬牛） 『西』兼・西の賢王・北の西の賢王 『東』兼・東の賢王・北の北の賢王	上56才	上57才	四38才								
	百廿三段	文あきらかに・手かく・さいく 王子殿	上57才	上57才	四39才								
	百廿四段	（食物・きる物・屋敷） 長法法師	上58才	上58才	四40才								
	百廿六段	からのいぬ・導師 （まき敷頭をみる故に）	上58才	上58才	四44才								
	百廿九段	まきふだ大なごん（木の足を切） （万の書） 『行』せだつる・おまじりか 『だ』じつと知れ・おまじりか 『さ』しつと知れ・おまじりか 『あ』しつと知れ・おまじりか 『お』しつと知れ・おまじりか	上59才	上59才	四48才								
百卅	いとけなき子すかしかけとす 一たはんはちおそく事あればあせを ながす・兼をのみてあせをもとむる にしてしなし おとしかたんとていぬ・兼の かよくかくとていぬ・兼の おまじりか・おまじりか おまじりか・おまじりか おまじりか・おまじりか おまじりか・おまじりか おまじりか・おまじりか	上60才	上60才	四51才									
百卅一段	よするのあそび	上60才	上60才	四51才									
百卅三段	とほのつくり道 大く殿・元良親王	上62才	上62才	四52才									
百卅四段	本陣置のやうはい・よるのおと なにかしの律師	上63才	上63才	四58才									
百卅七段	ともばさいしやう・すけりへ大なご ん人種・くこをまどけらす	上63才	上63才	四61才									
百卅八段	大衆殿内府・くすしあつしけ 兼法基・本基	上64才	上64才										
たぐさ 徒然草 説和抄 兼五采	万治三	上83才											
	寛文10	上37才											
	寛文十	上45才											
	元禄11	上59才											
絵本徒然 忍編・短草	徒下1才	徒下1才											
	徒下1才	徒下1才											
	徒下2才	徒下2才											
	徒下3才	徒下3才											
万治三 寛文十 元禄十 寛文十	徒下3才	徒下3才											
	徒下4才	徒下4才											
	徒下5才	徒下5才											
	徒下6才	徒下6才											
明和八 年刊本	徒下7才	徒下7才											
	徒下8才	徒下8才											
	徒下9才	徒下9才											
	徒下10才	徒下10才											

一覽すると、『絵抄』は（図のない数段を除き）ほとんどの段において一段に一面ないし数面の図を持ち、他本と比べて図数が非常に多い本であることがわかる。その図の内容は、他の絵入『徒然草』等の挿絵と似た「章話の場面」の図示である場合や、注釈書的な「章話の内容に関連した語句の図解」である場合等がある。

『徒然草』の諸刊本の挿絵に「共通した図柄」の例として、（執筆注・以下の段数は『絵抄』の段数に従う）上巻第八段の女性の脛を見て落下する「久米仙人」・第九段「女のかみすぢをよれる綱には。大象もよくつながれ」の女性と象・第十二段の囲われた「柑子の木」・第三十三段「九月廿日」の月夜・第五十四段の「かなへ」・第六十九段の「土おほね」の武士・第九十段の飛びついた「かひける犬」・第一百五段の「荒たる宿」・第二百一十一段の「唐船」等、下巻第八段の「馬あらふ人」と梅尾上人・第十八段の門前の「かたわもの共」と「すけとも」・第二十六段の鳥を首にかけた禁獄の「承仕法師」・第四十四段の「さぎちやう」・第五十二段の蓑笠姿の「登蓮法師」・第七十八段の王儉の蓮池と琴・第二百二段の聖海上人と「こまいぬ」等が挙げられる。これらは『徒然草』の作品世界の代表的な逸話の場面であり、諸本に共通した典型的な図像化とみてよいだろう。各刊本の同段の図を比べると、『なぐさみ草』と万治

三年板・寛文十年板の図の構図・絵柄が非常に似ており、挿絵の多い先行注釈書『なぐさみ草』の影響の大きさは『絵抄』にも窺える。元禄十一年板の図は『絵抄』の図との類似性が高い。明和八年板は近世後期風の絵柄をもつ。

ただし同段の図でも、各本によって視覚化される語句・場面や、共通する図柄ながらその構図・対象物の配置が異なる場合がある。例えば第六段の聖徳太子の逸話の場合、烏帽子姿の人物を中心とした『なぐさみ草』（参考図1）や万治三年板の図に対し、『絵抄』では鬢姿の太子像に「こゝをきれ、かしこをたて」の本文語句が付され、文字通り墓石を人々に砕き削らせている図（図2）が描かれている。すなわちこの図が『絵抄』の把握する『徒然草』の太子逸話のイメージであるといえよう。

頭書図の多くは、このような『徒然草』本文語句の視覚化の機能を担う。しかしその中には、下巻第六段「池の尼」「あつもり」・第十四段「善珠法師」他・第三十六段「もりとを」・第七十三段「鍾毓鍾會」（図3）・第七十五段「びしか」「播州まいふ」（図4）等、『徒然草』本文に直接登場しない逸話の図示もみられる。これらに関して『徒然草』古註では、例えば林羅山『野槌』（元和七年「一六二一」成立）の註に、『徒然草』本文内容と対照する形で逸話を引用した、以下のような記述が存在する⁽¹³⁾。

・池の尼の頼朝をたすけ熊谷か敦盛をたすけんとするも我子のことを思ふゆへなり父子の道は天倫なればたれかあはれと思はざらん (下之一) *下巻第六段)

・善珠法師は光明皇后の孽子也沙門となりて唯識を学べどもをろかなるゆゑにみづから恥辱としいよくはげみつとめて夏月のあつきにかうべはれて瓜のごとくたゞれ鬢髪もぬけ落るまでやまざりければひろく三蔵をあかせり又明詮法師元興寺にて法相をまなぶ天性にふくして寺を出ざらんとす雨滴の庭前の石をうちてくぼめるを見てかくやはらかなる物の極てかたき物をうがっはいかにそやとてすなはち我房にかへり年ひさしく学で法相宗の名をあらはせり昔物ならふ人こゝろざし屈していなかへまからんとて近江の国をとをりける時に或人斧を石にてとぐ者あり何の為ぞとへば針にするなりと答ふかの人さてはかうやうの者もあるぞかし吾こゝろざしは無下におとれりとして又都へ上り学問して終に博士と成其所をすりはりと名づくと云傳ふ

(下之一) *下巻第十四段)

・遠藤武者盛遠が年十八にして人の妻を忍び其夫を殺しうばひとらんとて夜あやまりて女の頸をきり大に驚きかなしみて出家して名を文覚とつきける類あり

(下之二) *下巻第二十六段)

・世説新語補十二云鍾毓兄弟小時值父晝寢因共偷服藥酒(中略)鍾氏が兒の酒をぬすみて拜せるは盜の中禮なき也 (下之四) *下巻第七十三段)

・史記韓非傳に衛彌子瑕が君の車にのり桃の餘を君にまいらす寵愛衰て此二事大なる罪なりとて誅せられぬ(中略)日本にも播州犬寺は昔蘇我入鹿が臣に枚夫と云者あり其妻奴とたはけて奴枚夫をあざむき山中に入狩をせんとて是を射殺さむとす枚夫二犬あり一犬飛て奴の弓弦をくひきり一犬おどりあがりて奴の喉をくひころす枚夫犬のために寺を立つ今の犬寺是也 元亨釋書に有 (下之四) *下巻第七十五段)

恩愛・道の嗜み・血氣・「僻事」・「頼むべからず」等、本文の内容から様々な逸話に着想を広げる『野槿』流の注釈であるが、『絵抄』作者はこのような先行の『徒然草』注釈書をも利用しつつ、視覚的な「補注」機能をもつ頭書図も配置していると考えられる。『徒然草』本文と相俟ってそのイメージを喚起させる頭書図(絵と語句)には、『絵抄』作者が各段の作品世界をいかに享受しているかが(諸本に共通する図像や諸注釈の利用も含めて)表現されているとみた場合、さらに様々な特質が見出されてくる。

三、『つれづれ草絵抄』の視覚化と〈愉しみ〉

上巻第十五段「糸による物ならなくに（わかれちの心ほそくもおもほゆるかな）」の歌の箇所では、『なぐさみ草』（図5）や寛文十年板等の場合、一つの図に「ふすゐの床（猪）・柴を運ぶ」「しづ山がつ」・家の中の「針仕事の女」が描かれている（『絵本徒然草』は「しづ山がつ」「猪」と農耕中の「女」を描く）。『なぐさみ草』の図は、歌の語の「糸」の意を「しづ」の女の針仕事の「糸」に掛けて一つの図に構成したものと考えられる。対して『絵抄』（図6）は、「しづ山がつ」・「ふすゐの床」を一つの図とし、その左に、二人の近世風の旅姿の人物と、別れ道の一本松の根元に「糸巻き」を配置した別図を掲げている。「今の世の人の。よみぬべきことがらとは見えず」という『徒然草』第十五段本文と対照すると、『絵抄』のいささか心細そうな表情の旅人の図は、『徒然草』本文の引用する古今集歌の「わかれちの心ほそくもおもほゆるかな」をそのまま「今（＝近世）の世の人」が「演じている」図であるといえる。このような『絵抄』の「絵」と本文の組み合わせは、『徒然草』の一種の「近世的」解釈の図像化、といえるのではなからうか。

『絵抄』の頭書図は、『徒然草』の本文内容の人物・事件

の状況を近世風俗画的な絵柄で描くことが多い。そこには、しばしば本文の〈譬喩の視覚化〉もみられる。上巻第四十三段「氣のあがる病」と同様に戯画的な同第三百十段「いとけなき子をすかしおどす」（図7）の図では「心」の働きを説く本文の喩えの「あせをもとむる」人物が描かれる。下巻第八十一段の本文「欲をなしてたのしひとせんよりはしかじ財なからんには」の喩えである「ようそをやむもの水にあらひてたのしむ」光景も図示されている（図8）。上巻第二百二十六段も「からのいぬ」そのものが出現し、「をのれ先酔てふしなば。人はよもめさじ」の喩えである「二方に。はつきたる物なれば。もたぐる時先我頭をきる」有様がそのまま描かれている（図9）。「剣にて切こゝろみたりけるにや。いとおかしかりき」とある本文の批評的態度のごとく、譬喩があたかも実際の場面のように「絵」として描き「こゝろみ」られているところに、滑稽な「おかし」さが窺える。

『徒然草』の随想的章段（例えば上巻第十二段など）では、「けんかう」「けんかう法師」等と記された僧形の人物像が頭書図の中にしばしば登場する。下巻百四段では、「馬をひきたふして。のる人泥土の中にころびり」の実況的な図・「横川の常行堂」の龍花院の額の裏書を確認する図・那蘭陀寺の談義の図（図10）など、「自讃の事七つ」

にそれぞれ「けんかう」が登場する図が付され、各逸話の絵物語的な視覚化がなされている。

短い列挙的章段である上巻第七十三段「いやしげなる物……おほくて見ぐるしからぬは……」の場合、『絵抄』(図11)では上巻卅五ウ・卅六オにわたって、列挙されたものうち、七つが描かれている。『なぐさみ草』の図(図12)は、子孫・調度や仏等・石草木の多さを一図にまとめている。図数の多い同様の例は上巻第九十八段(図13)にもみられる。頭書図の幾つかには、『徒然草直解』のような本文中の難語図解的機能も見受けられる(下巻第四十四段「さぎちやう」等)が、これらの『絵抄』の例の場合はその機能以上に、段の内容のいささかユーモラスな「絵尽くし」的視覚化——図像化そのものの愉しみ——の姿勢すら伝わってくる。上巻第九十七段で「くちはみにさゝれたる人」(図14)の有様を描く『絵抄』の図は、「めなもみ」を摘む人の図を示す『なぐさみ草』や「めなもみ」の植物図を示す『徒然草直解』の注釈書的な態度とは、趣を異にしている。

図と本文の組み合わせから生まれる面白みや〈愉しみ〉——『徒然草』そのものがもつユーモアにも通じるような——が『絵抄』の特質であるならば、「艸田斎寸木子」といった戯号の使用も、本書のそうした精神にふさわしいも

『徒然草』近世的享受の一面

のであったのではないか。なお、先行作品の構図利用等に關しては、絵入版本諸本に限らず近世初期の『徒然草絵巻』等の影響もさらに考察すべきところであるが、その他の注釈書等との比較とも含めて今後の課題としたい。

注

- (1) なお、本書と同様に刊記の空白部をもつ蓬左文庫の同年刊本(48尾2/1)の後表紙見返しには、単梓内に「京師三條通升屋町／御書物所／出雲寺和泉椽」とある。注(5)の市古氏論文の作者年譜「元禄四年(一六九一)正月／『徒然草絵抄』(京都万屋庄兵衛・同大文字屋七郎兵衛板)刊。署名は「雒陽処士艸田斎寸木子三徑図讚」。
- (2) 鈴木行三氏『戯曲小説近世作家大観 第一巻』(中文堂書店、昭8・1)。
- (3) 大田栄太郎氏「苗村丈伯の略伝——附男重宝記と浮世鏡との比較——」(『国語と国文学』17巻11号、昭15・11)
- (4) 国立国会図書館蔵(105・61)写本『日本医譜』三編巻二十五の記述は次の通り。

苗村常伯 一丈伯

一名丈伯又称文安江州彦根人仕井伊侯為侍医有故致仕隱同州野洲郡落合村博覧洽聞無所不窺所著有正傳或問増補頭書俗解龔方集八卷錦繡段熟字訓解貞永式目頭書繪入開庭訓往来絵入同首書節用集頭書女重宝記理屈物語元禄中人乃益夫戚族也

(5) 市古夏生氏「苗村丈伯の伝と類板の問題」(『国文白百合』20、平1・3初出)、『近世初期文学と出版文化』(若草書房、平10・6)所収。

(6) (5)に同じ。

(7) (5)に同じ。

(8) (3)に同じ。

(9) (5)に同じ。

(10) 高橋秀栄氏「絵入本徒然草の普及」及び「図版解説」(『神奈川芸術祭特別展 徒然草の絵巻と版本』、神奈川県立金沢文庫、昭61・10)

(11) 市古夏生氏「『理屈物語』における作者の問題」(『国文白百合』6、昭50・3初出)、(5)同所収。

(12) 表中に対照した刊本は次の通りである。

・松永貞徳『南俱左見草』(慶安五年「一六五二」自跋)国立国会図書館蔵本(141・29)、及び日本古典文学影印叢刊28・29『なぐさみ草』(上・下)(貴重本刊行会、昭59・8~11)

・岡西惟中『徒然草直解』(貞享三年「一六八六」板)福岡女子大学付属図書館蔵本(911・4~1044)

・西川祐信『絵本徒然草』(元文五年「一七四〇」京都菊屋喜兵衛板)及び『絵本忍婦草』国立国会図書館蔵本(京乙247、か50)、『テーマ展 絵本徒然草』(金沢文庫、平11・6)

・『徒然草』(寛文十二年「一六七二」板)、青木晃氏解題『絵入版本 徒然草』(和泉書院、昭56・4)穎原文庫本

影印

*その他については、以下の国文学研究資料館所蔵マイクロフィルム資料を併用した。

・『徒然草吟和抄』(内題「頭書徒然草絵抄」元禄三年「一六九〇」京都川勝五郎右衛門・大阪帯屋甚右衛門板)国文学研究資料館初雁文庫蔵本(12・657・1~5)

・『徒然草』(万治三年「一六六〇」京都林和泉椽板)吉永文庫(吉永登氏)蔵本(2158)

・『徒然草』(寛文十年「一六七〇」江戸大和田安兵衛板、「師宣古版」書入有)北海道大学附属図書館蔵本(L445・TSU)

・『徒然草』(元禄十一年「一六九八」万屋庄兵衛板)学習院大学国語国文学研究室蔵本(914・5~5005)

・『徒然草』(明和八年「一七七二」京都嶋本作重郎再板)北海学園大学附属図書館北駕文庫蔵本(叢110)

(13) 徒然草古注釈大成『徒然草拾遺抄 徒然草野槌』(日本図書センター、昭53・11)、傍線は引用者が付した。なお、『絵抄』の『徒然草』段の分け方は『野槌』・『徒然草句解』・『徒然草盤斎抄』等と共通し、『野槌』巻頭の兼好歌集に「世の中を」の歌の記述がある。善珠法師・鐘氏・彌子瑕等は『なぐさみ草』の註等にも引用されている。三浦邦夫氏『仮名草子についての研究』(おうふう、平8・10)や神谷勝広氏『近世文学と和製類書』(若草書房、平11・11)の指摘等の『野槌』の問題と併せ、追考としたい。



図 2



図 1



図 4

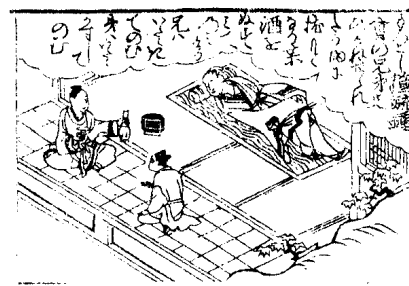


図 3



図 6



図 5



図 8



図 7

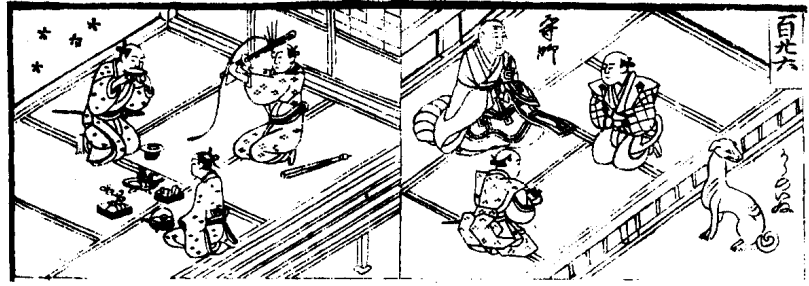


図9



図10

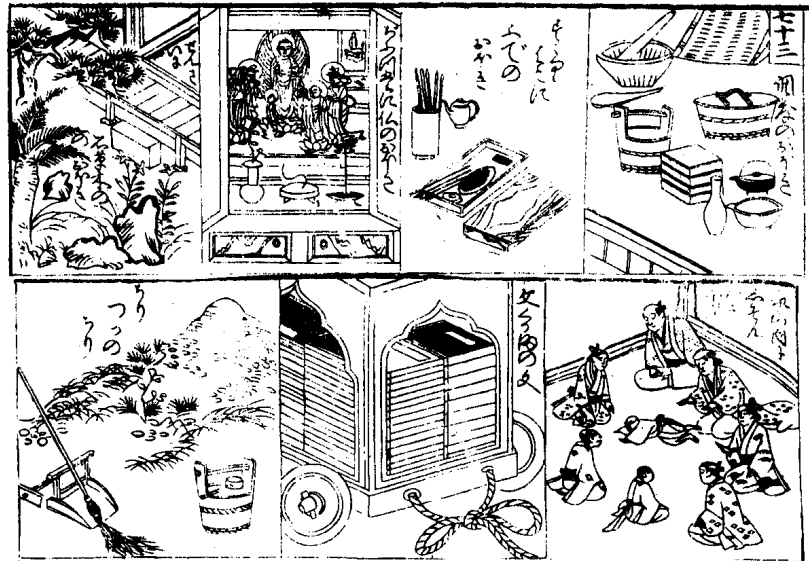


図11



図12



図14

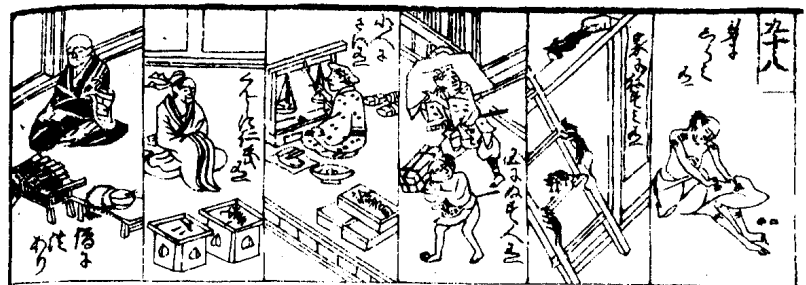


図13

*『なぐさみ草』図1・5・12は秋田県立図書館蔵本(19-50)、その他の図は『つれづれ草絵抄』架蔵本より引用した。